

25) 乳児2症例の心肺蘇生後における低体温療法の治療経験

大橋さとみ・本多 忠幸(新潟大学)
遠藤 裕(救急部)
渡辺 逸平・佐藤 一範(同 集中治療部)

乳児2症例で心肺蘇生後の低体温療法を経験した。症例1は2歳男児、症例2は9か月男児で小脳虫部低形成を合併していた。2例ともICU入室時循環は安定、自発呼吸は微弱、JCS300であった。症例1は心肺停止より8時間半、症例2は6時間後よりミダゾラム鎮静下にブランケットを用い全身冷却を開始、32~34℃を各々5日間、2日間維持、2~3日間かけ復温した。症例1では低体温3日目、脳浮腫を認め復温を延期した。2例とも重大な副作用はみられなかった。神経学的予後は症例2は良好であったが、症例1では脳萎縮が進行、呼吸障害、痙攣が残存した。しかし脳波は改善が見られた。小児も積極的な低体温療法の適応となると考えられた。

II. 特別講演

「fMRI: その基礎と実践」

新潟大学脳研究所脳機能解析学分野
教授 中田 力先生

第7回新潟周産母子研究会学術講演会

日時 平成10年11月21日(土)
午後2時より
会場 新潟大学医学部第3講義室

I. 一般演題

1) 妊娠中毒症における母体子宮動脈血流の検討

平杉嘉一郎・渋谷 伸一
村川 晴生・関塚 直人
長谷川 功・高桑 好一(新潟大学)
田中 憲一(産科婦人科学教室)

〔目的〕妊娠中毒症の重症度と母体子宮動脈血流異常との関連を独自に作成した子宮動脈血流スコアを用い、後方視的に検討。

〔対象と方法〕過去5年間に当科で分娩管理した単胎

の妊娠中毒症73例を対象とし、カラードップラー法を用い、両側子宮動脈血流計測を施行。Resistance Index (RI) および Diastolic notch の有無で評価を行い、胎盤側および非胎盤側に分類。RIは当科の95%tileを越えるものを異常とした。片側の血流波形に関し、RIの異常および notch が認められた場合をそれぞれ1点、正常なら0点とし、左右の合計点数を子宮動脈血流スコアとし、スコア高値群と低値群での種々のパラメーターにつき検討を行った。

〔成績〕中毒症重症例は子宮動脈血流スコア高値群で有意に高率に重症例が認められた。また分娩週数および児体重、IUGR、胎児仮死の有無に関しても2群間に明らかな有意差が認められた。

〔結論〕重症妊娠中毒症は、高率に母体子宮動脈血流の異常を伴っており、妊娠中毒症の重症度評価に子宮動脈血流計測は有用と考えられる。

2) 超低出生体重児における未熟児網膜症の重症化因子の検討

今村 勝・池田佐和子
大石 昌則・永山 善久
坂野 忠司・山崎 明(新潟市民病院)
小田 良彦(新生児医療センター)
山崎 雅久・寒河江 豊(同 眼科)

平成5~9年に入院した超低出生体重児53例をROPの重症化因子について、眼底の無血管野の広さを基準として人工換気期間、酸素投与日数、RDS、PSF、PDA、抗PG製剤、輸血回数、rHu-Epo、Ht値、毛細管血pH、毛細管血CO2、光線療法日数、無呼吸発作回数の検討を行ったが、全ての因子で有意差は得られなかったが、重症群でrHu-Epo投与回数が多く、毛細管血pHが低い傾向が認められた。ROPの重症化の評価に眼底の未熟性を表す無血管野の広さが有用と思われるが、無血管野の広さに影響を及ぼす因子についてはさらに検討が必要である。

3) 当科における超低出生体重児の短期的予後の変遷と死因の検討

吉田 宏・小田切徹州
榎原 清一・山崎 肇(鶴岡市立荘内病院)
伊藤 末志(小児科)

1983年から1997年までの15年間に当科へ入院した超低出生体重児は57例で、年平均約4例の症例があった。